

1 教師にとっても最も大切で困難なことは、「教えない」こと

これまでの授業過程、「教師が発問→子供たちに考えさせ意見を出させる→教師がまとめる」。アクティブラーニング風だけだ。教師がこだわる教師主体の授業だ。これからは、「目標を子供たちが共有→子供たちによる解決の見通しと計画→子供たちによる振り返る授業」。子供の学びの活動に教師が入る余地などない。

2 校内研究であるという意識

教科に強い教師の育成を目指しているのではない。だから校内研究が教科を理解している教師の独壇場であってはならない。全教師の授業力の向上を目指しているのが校内研究だ。個人研究の場ではない。

①同じ指導方法にこだわる

各自が授業をばらばらに工夫するのではない。同じグッズ、同じ問題解決過程、同じ板書、同じノート指導、同じ見通しの指導、同じまとめ方の指導、同じ振り返り指導等、共通点を持てば、お互いの授業を見たときに自分だったらこうしようと自分事に考える。これが校内研究だ。

②続く教師のために

今後、各学校に転入してくる教師の育成が課題となる。だから、同じスタンダードや同じベーシックの授業にこだわるのだ。先に学んだ教師に自分流の授業をされると次に続く教師は、何を基準にしたらよいかわからなくなる。指示した方法が続けること。

③授業のユニバーサルデザイン（高知県ではベーシック）

授業のユニバーサルデザイン（高知県ではベーシック）は、障害のある子供のためにだけ作られたものではない。全部の子供に「ないと困る」「あると便利」な内容であることが重要である。授業のユニバーサルデザイン（高知県ではベーシック）は、「誰にも分かりやすく、安心して授業に参加できる」環境の一つである。

3 授業の場での再確認

①「付けたい力」を前面にした課題の設定

今までのように教師のリードで前時の振り返りから入るだけでなく、本時の授業の目標や評価基準や単元全体の目的等子供たちと確認して課題設定を試すとよい。これまで定番としてきた「教師の効果的なプレゼン」の概念を疑う必要がある。

②見通しの確認（グーパー）

自分はグーパーの確認はしない等は個人研究となる。後に続く教師のためにも、学力向上対策室の指示した「見通しを持てるかどうかの確認」を必ず行う。これがアクティブ・ラーニングやインクルーシブ教育の重要な要素だからだ。これがないと、従来のわかる子だけの授業となり、新学習指導要領の趣旨にもそぐわなくなる。

③タイムマネジメント

チャイムがなくても終わらない授業。子供たちのことを考えているだろうか。授業展開に問題や、教師がこだわり過ぎると時間オーバーの授業となる。決してよいことなどない。問題解決学習の授業過程の「まとめ」「振り返り」に時間を多くかけるとよい。そのためには、学習課題の設定を出来るだけ短くする。

④学習リーダー（北海道教育大学複式学級報告書改訂版）

ア リーダー学習とは 学級の児童生徒を「学習リーダー」として、学習を進める方法である。

イ 学習リーダーの主な役割

・ 学習の流れに従って、進行する。 ・ 簡単な事項について、指名したり、指示したりする。 ・ ウ 一人学習やグループ学習などの時間設定をする。 ・ グループ学習などで、意見や考えを整理する。

ウ教師の適切な関わり

児童生徒が、学習をするのは自分たちなので、「自分たちで授業を進め、自分たちで課題を解決する」という意欲を高めることが重要である。教師は、課題の意識を高めたり、解決の見通しをもたせたり、個に応じた習熟問題を用意したりするなど、効果が出るように関わるのが大切である。